大堤沼インクルーシブ公園化計画

【アブストラクト】
本探究では地域活性化に着目して、近年利用者数が減少傾向にある大堤沼公園をインクルーシブ公園に創り変えることを目的とした。アンケートなどを通して地域住民の考えを積極的に取り入れ、住民と一丸となってこのプロジェクトを進めた。アンケートや住民との話し合いの機会を経て、我々の考えと照合し、公園の活性化には新遊具の設置などよりも公園の外装を整えて足を運びやすくすることが第一優先だとわかった。本探究は時間がかかるため、後輩に引き継ぐ形で進められる。

キーワード：大堤沼　公園　バリアフリー　地域住民　地域活性化

【本文】

1、はじめに

近年注目されるSDGsで示されている17の目標の中で「11、住み続けられるまちづくりを」に着目し、生活の中で多く関わるインフラの中でも特に公園に重点をおいて研究をしたいと考えた。

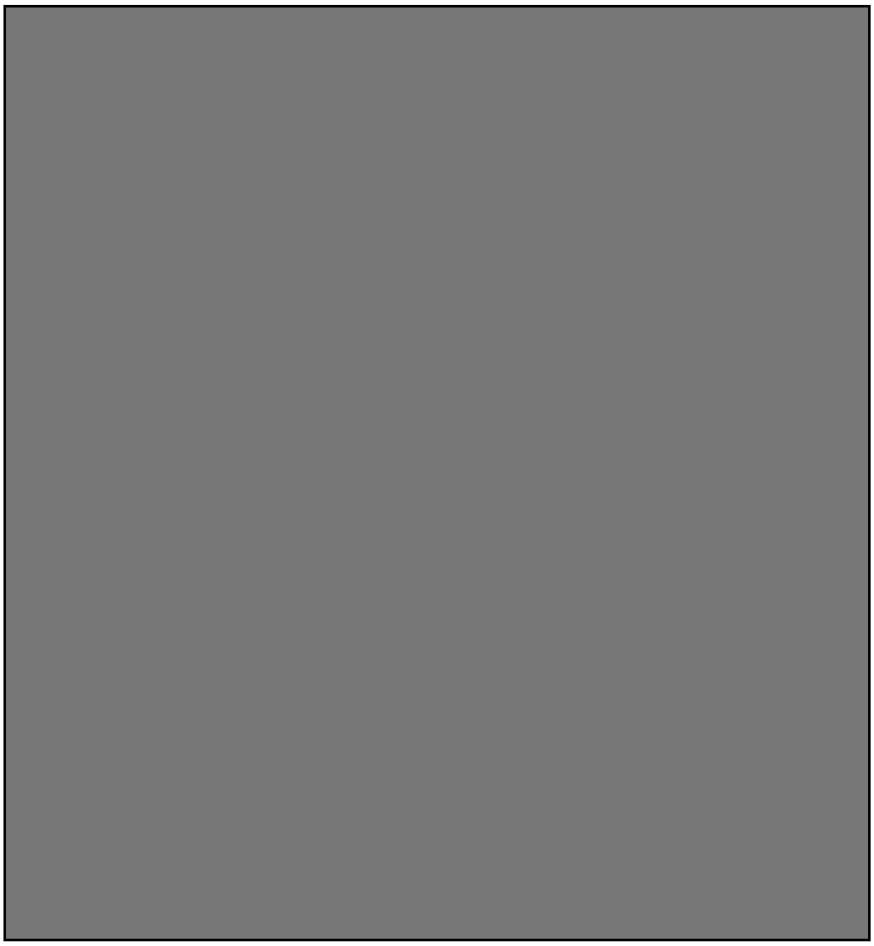


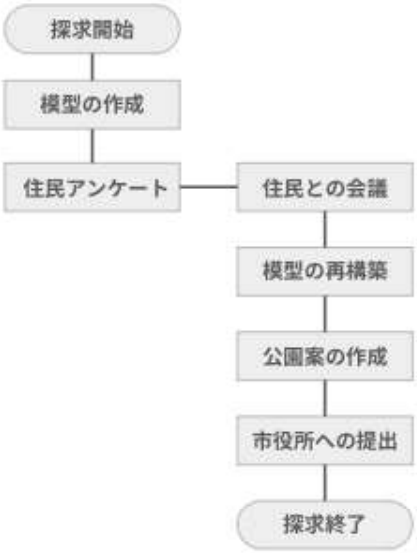
図1は富山県高岡市内のグループである「公園ゲリラ」の活動が新聞に掲載された際の新聞スクラップである。少子化で使われる機会が少なくなった公園を再利用し、地域の健康増進やコミュニティ創出、スポーツ振興を目的として活動しており、私たちが構想している公園を利用した地域活性化の例と言える。高岡市の他にも地域住民で使われなくなった土地を有効活用している例は多く存在するため、全国的にも需要があるものだと考えた。

図1　富山新聞に掲載された地域活性化のスクラップ

大堤沼[1]にある大堤沼公園は、現在草が生い茂る広場のような場所になっており地域住民から有効活用されているとは言えない場所である。そこで弊校先輩方が行っていた「大堤沼インクルーシブ[2]公園化計画」を引き継ぎ、われわれの探究を進めた。私としても地域と密接に結びついた研究ができるため、たいへん喜ばしく、実りのある探究をしようと考えた。

2、探究方法

先行研究があり、それに順じながらも我々の班ならではの考えを取り入れるために住民とのコミュニケーションを多く取ることが妥当だと考えた。



①先輩方の先行研究を基に模型を作成

②住民に公園の作成についてのアンケートを取り、会議を通して住民の意見をまとめる

③住民の意見を基に①で作成した模型を再び見直す

④公園案を市役所に提出し実現する

図2　探求方法のフローチャート

3、探究内容

Ⅰ．引き継ぎ（2022年12月～2023年6月）

・先輩方の研究内容を把握し、大堤沼に赴いて現状把握をする。

・先輩方が作成したアンケートの電子データを基に紙媒体を作成。

Ⅱ. 模型作成（2023年7月～10月）

・山形大学の先生に頂いた鶴ケ谷地区[3]のジオラマ模型を基に公園の予定地を付け加えて視覚的に見やすいようにする。

写真1　初期の模型

写真2　作成後の模型

Ⅲ. 地域交流（2023年11月～2024年1月）

・鶴ケ谷地域の各町内会会長の方々と仙台三高にて公園案を提示・今後の活動についての模型を使用したディスカッションを行った。

・公園に関するアンケート（紙媒体）を各町内会に配布し、同時に電子媒体のアンケート調査も開始した。このアンケートの目的は、大堤沼公園の現在の使用状況や、公園への要求などを把握することである。

図2は公園の不便なところについて調査した項目で集められた意見をテキストマイニングしたものであり、特に多いものとして「階段」「行く」「急な」などの公園への出入りについての回答が多く得られたことがわかる。

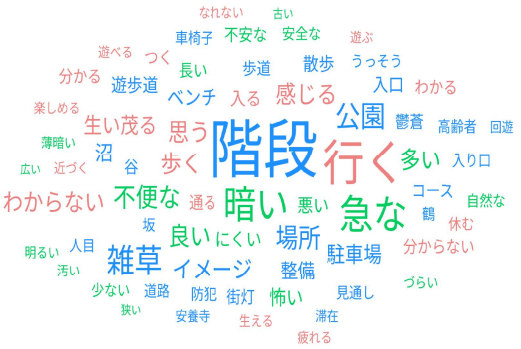
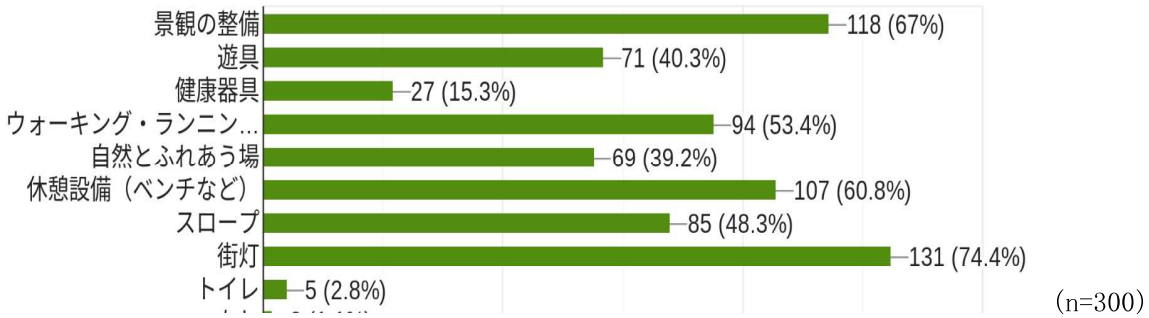


図2　テキストマイニング

表1　アンケート結果



（n=300）

表1は公園に求めるものについての調査をした項目での結果を棒グラフで表したものである。
結果としては「街頭」についで「景観の整備」「スロープ」などが挙げられ、テキストマイニングと同様公園の整備が必要であることがわかる。一方で、遊具などの器具の設置については優先度があまり高くないこともわかった。

・鶴ケ谷市民センターで開催された鶴ケ谷杜のフェスティバルにてスライド発表・仙台市立鶴ケ谷中　学校の学生との鶴ケ谷地域についてのパネルディスカッションを行った。

写真3　スライド発表の様子

写真4　パネルディスカッションの様子

スライド発表では公園案を地域住民に理解してもらうとともに地域活性化の観点で関心を集めることができた。
パネルディスカッションでは、鶴ケ谷地域では高齢者が多いという現状を踏まえて中高生からみた鶴ケ谷の現状にてついて話し合い、住民たちが普段気に留めないようなことでも中高生から見たら不便であるようなものなど、新たな観点で地域を見直す機会となった。

Ⅳ. 引き継ぎ（現在）
具体的な公園案を市役所に提出するというところまで探究を進めることができなかったため、仙台　三高61回生に探求内容を引き継いでもらうことになった。

4、考察
Ⅰ. 班での考察
アンケート結果などから階段や街灯などの「安全」に関わる設備を住民が欲しているということが　わかったため、今後は設備の面を詰めていくべきかもしれない。
また、現在の公園内では雑草が生い茂っているため、草刈りが必要だと思われる。

Ⅱ. 個人での考察
当初はインクルーシブ公園を目指すために健康器具やウォーキング・ランニングコースの設置などを　考えていたが、アンケートや住民との話し合いによって、公園内の設備を優先するべきだと考え　た。具体的には、現在の急な階段では高低差のある大堤沼に入ろうとすることすら困難な状況であ　り、スロープの設置をしてほしいなどの声が多く寄せられた。一方で、沼に飛来する水鳥などの生　態環境を考慮して今のままで手を加えないでほしいなどといった声も寄せられたことも考えなくて　はならないことであるだろう。

5、おわりに
この探究を遂行するにあたり、探究を通して支えてくださった渡部敦先生、佐光克己先生に深く感謝を申し上げたい。そして先輩方の代から継続して本探究にお力添えをいただいた地域団体「まるっとつるがや」様にも深く

感謝の意を表する。アンケートにご協力いただいた鶴ケ谷地区各町内会の皆様がいなければこの地域密着の探究はできなかっただろう。修学旅行の際に見学させていただいた花博記念公園鶴見緑地関係者の皆様、及び大阪府建設局の山田様にも感謝申し上げる。

注
1）宮城県仙台市宮城野区安養寺に位置する地名
2）障害の有無に関わらずすべての人が利用できる公園

参考文献
仙台三高59回生普通科探求班
「大堤沼インクルーシブ公園化計画」.”大堤沼をインクルーシブ公園へ”.
大堤沼をインクルーシブ公園へ

付録
修学旅行での探究活動について
　我々は修学旅行で大阪府にある花博記念公園鶴見緑地に訪れた。大阪府建設局の山田様にインクルーシブ公園の作成にあたっての注意点や、鶴見緑地の設計にあたってバリアフリーの観点から特に留意した点などを座学で講義していただいた。

写真5　噴水の様子

写真6　インクルーシブ遊具

上写真5及び6は鶴見緑地内にある噴水と遊具の様子である。噴水は、視覚だけでなく聴覚でも楽しめるため、目の不自由な方にも楽しんでもらえるという利点があって作成したとのことだった。また、池の活用にあたって1m強の柵を設けることで小さい子供が池に落ちるというリスクを減らせることができるということも教えていただいた。インクルーシブ遊具では、基本的に身体の能力によって利用しやすさに差異が出ないように気をつけているとのことだった。